

41869

教科書文庫

4
815
41-1912
200030 1740

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

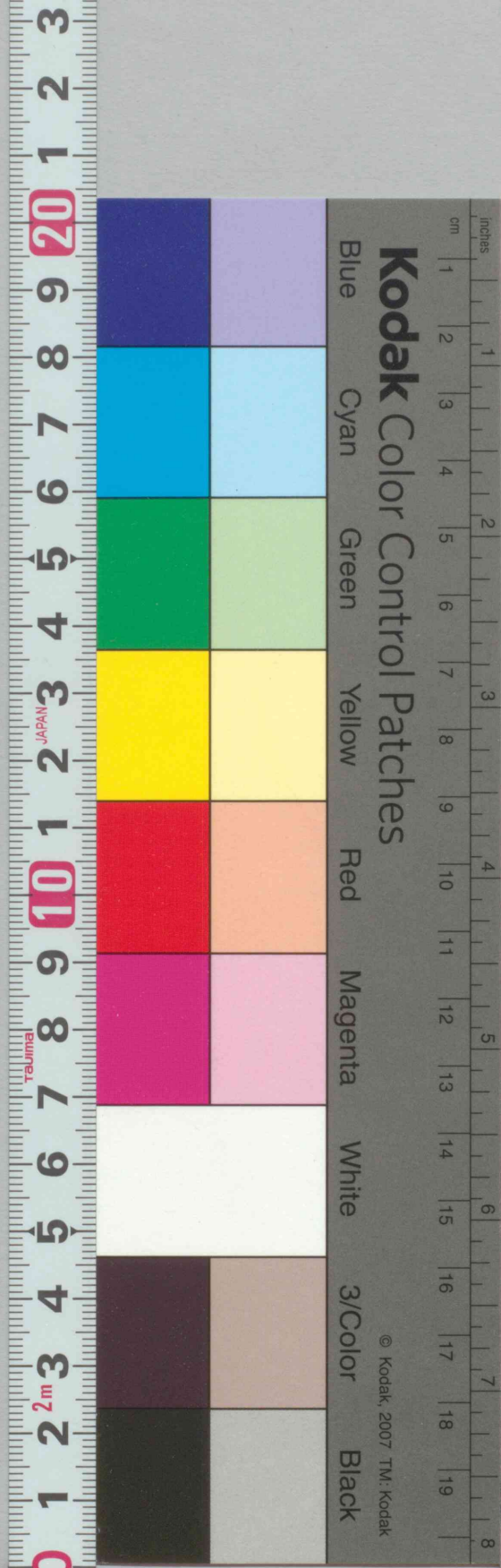


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ka14
資料室

日本文法教本

文部省檢定濟
金澤庄三郎著

下卷



文學博士 金澤庄三郎著

日本文法教本

東京 開成館藏版



下卷目次

第三篇

第一章	動詞の性	練習問題 第一	一
第二章	用言の法	練習問題 第二	五
第三章	助動詞の法	練習問題 第三	一五
第四章	時	練習問題 第四	三
第五章	品詞の轉成	練習問題 第五	三
		練習問題 第六	一七

下卷目次

余係守三年級のとき
伊藤より教授
さ村
贈
本田司郎
受中
26年8月31日

第四篇

第一章 文章の主要成分……………三五

練習問題 第一

第二章 文章の主要成分の構成……………三九

練習問題 第二

第三章 文主……………四七

練習問題 第三

第四章 修飾語及びその構成……………五〇

練習問題 第四

第五章 文章の主要成分の位置……………五五

練習問題 第五

第六章 文章の主要成分の併置……………六三

練習問題 第六

第七章 文章の主要成分の省略……………六六

練習問題 第七

第八章 句及び節……………七三

* 練習問題 第八

第九章 文章の組織……………七九

練習問題 第九

第十章 文章の性質……………八七

練習問題 第十

第十一章 係結法……………九二

練習問題 第十一

第十二章 文章の解剖……………九五

練習問題 第十二



日本文法教本 下巻

文學博士 金澤庄三郎著

第三篇

第一章 動詞の性

他動詞。

太郎字を書く。

次郎球を打つ。

この例の中なる書く、打つといふ動作には、必ずその動作の及ぶ字、球などの事物あり。かくの如き性質の動作を他動といひ、他動をあらはす動詞を他動詞といふ。

自動詞。

花咲く。

馬走る。

この例の中なる咲く、走るといふ動作には、その動作の及ぶ事物なし。かくの如き性質の動作を自動といひ、自動をあらはす動詞を自動詞といふ。

動詞の性と活用。動詞には、語根を同じくしながら、性の異なるによりて活用を異にするものあり。例へば折るといふ動詞は、自動をあらはすときには、下二段活用をなし、

柳は雪にあひても折れず。

他動をあらはすときには、四段活用をなす。

雪は柳を折らず。

また性の異なるによりて活用を異にせざるものあり。例へば吹くといふ動詞は、自動をあらはすときにも、他動をあらはすときにも、共に四段活用をなす。

風吹く。

兵士喇叭を吹く。

練習問題 第一

次の文章の中より動詞をぬき出して、その性をいへ。

- 一。弟は日々学校に行く。
- 二。かれは巧に鳥を射たり。
- 三。晴れたる日には、富士山も見ゆ。
- 四。人々つれだちて、野に遊ぶ。
- 五。公はしばらくも國を思はざることなし。

- 六。妹は鳥に餌を與へたり。
- 七。舟に乗りて魚を釣る翁を見たり。
- 八。學校長は講堂に生徒を集めて、式を擧ぐ。
- 九。村人集りて火を消したり。
- 一〇。星やうやく消えて、雞の鳴く聲遠く聞ゆ。

練習問題 第二

次の諸動詞の性を答へよ。但し兩性あるものは、その活用をも示せ。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 一。開く。 | 二。眺む。 | 三。踏む。 |
| 四。舞ふ。 | 五。殺す。 | 六。流る。 |
| 七。あり。 | 八。誘ふ。 | 九。賣る。 |
| 一〇。語る。 | 一一。笑ふ。 | 一二。埋む。 |
| 一三。埋る。 | 一四。倦む。 | 一五。食ふ。 |

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 一六。歩む。 | 一七。破る。 | 一八。光る。 |
| 一九。亂る。 | 二〇。蹴る。 | |

第二章 用言の法

用言の法。もと動詞及び形容詞に活用が生じたるは、異なる用ひやうのあるによるものなれば、動詞及び形容詞の各活用形には、一つ／＼定まれる用法あることを知るべし。この用法を用言の法といひ、すべて次の七種あり。

- | | |
|----------|----------|
| 一。終止法。 | 二。連用法。 |
| 三。連體法。 | 四。將然前提法。 |
| 五。已然前提法。 | 六。中止法。 |
| 七。命令法。 | 七。名詞法。 |

形 動詞 終止
 活用 連用
 終止

係

ヤ
カ
カ
カ

こと

終

終止法
連射形

終止法
終止法
終止法

下
卷

終止法。

生徒書を讀む。

梅の實落つ。

花赤し。

家新し。

前の例の中なる動詞讀む、落つ、形容詞赤し、新しはいづれも言ひきりて文章を終止するに用ひてあり。かくの如き用法を終止法といふ。

終止法には、普通に終止形を用ふ。但し用言の上にぞ、なむ、やまたはかといふ、亘爾乎波の來るときは、連體形を用ひ、こそといふ、亘爾乎波の來るときは、已然形を用ふ。これらは、なほ第四篇に説くべし。

終止法に用ふる活用形

終止法の誤

口語の動詞にては、終止形と連體形と相同じきが故に、文語にても、これを混同して、普通の終止法に連體形を誤り用ふることあり。注意すべし。またシク活用の形容詞にては、終止法にししといふ一種の終止形を用ふることあり。

軍歌の聲勇ましし。

連用法。

書を讀み終ふ。

かの城落ち難し。

この例の中なる動詞讀み、落ちはいづれも、下、用言に連ぬるに用ひてあり。かくの如き用法を連用法といふ。連用法には、連用形を用ふ。

形容詞の連用形も、下、用言に連ぬるに用ふることに、前に説き

連用法に用ふる活用形

イ
有

たり。例へば、

花赤く咲く。

家新しく建つ。

但し、この場合には赤く、新しくは轉じて副詞となれるなり。されば、形容詞は連用法を闕く。

連體法。

書を讀む人。

梅の實の落つる音。

赤き花。

新しき家。

この例の中なる讀む、落つる、赤き、新しきは、いづれも、下體言に連ぬるに用ひてあり。かくの如き用法を連體法といふ。

此の例は、
例へば、
之を記す

連體法に用ふる活用形

連體法には連體形を用ふ。

言ふは易く、行ふは難し。

故きを温ねて、新しきを知る。

この例の中なる言ふ、行ふ、故き、新しきは、皆用言の連體形を、下なる名詞を略して直に名詞の如く用ひたるものなり。動詞の連體法にも、また誤りて終止形を用ふることもあり。注意すべし。

將然前提法。

書を讀まば、おもしろからむ。

梅の實落つとも、拾はじ。

花赤くば、摘まむ。

家新しくとも、人住まざらむ。

連體法の誤

花赤く、葉青し。
家新しく、庭廣し。

この例の中なる讀み、落ち、赤く、新しくは、いづれも文中にありて語勢を中止するに用ひてあり。かくの如き用法を中止法といふ。

中止法に用ふる活用形

中止法には連用形を用ふ。

命令法。

書を讀め。

梅の實落ちよ。

前の例の中なる動詞讀め、落ちは、いづれもそのあらはす動作をなすべきことを、他に命令するに用ひてあり。かくの如き用法を命令法といふ。

命令法に用ふる活用形

命令法には命令形を用ひ、四段活用とナ行變格活用、ラ行變格活用との動詞を除きては、必ず「且爾乎波よ」を添ふ。形容詞には命令法なし。

練習問題 第三

次の文章の中にある動詞、形容詞につきて、用言の法を説明せよ。

- 一。國富み、兵強し。
- 二。身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げよ。
- 三。先生、情に篤く、義に勇み、甚だ古武士の風あり。
- 四。三人行へば、必ずわが師あり。
- 五。清き泉涌き出で、旅人こゝに足をとむ。
- 六。われはたゞ、勉むるの樂しきを覺ゆ。
- 七。獅子は、獸の王の稱あり、吼ゆる聲、雷の如し。

- 八。聞く人皆その志の固きに感ず。
- 九。朝に道を聞けば、夕に死すとも、可なり。
- 一〇。足るを知れ。

次の動詞形容詞につきて、一つくその用言の法を造れ。

- 一一。鳴く。 一二。起く。 一三。著る。
- 一四。受く。 一五。近し。 一六。樂し。

次の文章の中に、用言の法を誤れるものあらば、正せ。

- 一七。十二歳以上の者は入場することを得る。
- 一八。今日ほどおもしろき日はなけれ。
- 一九。日本は永久の平和のために韓國を併すに至れり。
- 二〇。外國文をこまかに譯すこと難し。
- 二一。この湖より溢る水は南へ流る。
- 二二。狭しとも、膝を容る家あり。
- 二三。境内に車を引き入るを禁ず。

第三章 助動詞の法

助動詞の法。 助動詞にも、動詞、形容詞と同じく活用あれば、用言の如く、また種々の用法あることを知るべし。この用法を助動詞の法といふ。助動詞の活用形は、その趣、動詞、形容詞に似たるが故に、助動詞の法も、その意義、活用形ともに用言の法と殆ど相同じ。

終止法。 助動詞の終止法の用例は、次の如し。

會社は社員をして滿洲に行かしむ。
 汝は臺灣に行くべし。

助動詞の終止法にも、またその終止形を用ふ。但しきといふ助動詞に限りて、その連體形を用ふることあり。火災は二時間の長きに亙りて鎮火せざりし。

連用法。 助動詞の連用法の用例は、次の如し。

われは汝を東京に行かしめ難し。

陛下還幸あらせ給ふ。

助動詞の連用法にも、またその連用形を用ふ。

連用法によりて、すべし、たし、まじといふ四助動詞の連用形を、下ありといふ動詞に連ぬるときは、いづれもこれと融合してざり、べかり、たかり、まじかりとなる。

われは行かざりき。

われも行くべかりき。

ざり、べかり、
たかり、まじ
かりの構成

われも行きたかりき。

われは行くまじかりき。

これらは皆ラ行變格活用と同じき活用をなし、これに似たる活用形を具ふ。されどその用法甚だ廣からず。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ざり	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ
べかり	べから	べかり	べかり	〔べかる〕	〔べかれ〕	—
たかり	たから	たかり	たかり	たかる	〔たかれ〕	—
まじかり	まじから	まじかり	まじかり	〔まじかる〕	〔まじかれ〕	—

連體法。 助動詞の連體法の用例は、次の如し。

行かしむること。

行くべきこと。

助動詞の連體形も、動詞と結びつき、また下なる名詞を略し、直に名詞の如く用ひらるゝことあり。

及ばざるは過ぎたるより優れり。

助動詞の連體法にも、またその連體形を用ふ。

將然前提法。 助動詞の將然前提法の用例は、次の如し。

行かしむれば。

行かしむとも。

行くべくば。

行くべくとも。

助動詞の將然前提法も、必ず且爾乎波ばまたはともを伴なふ。ばは助動詞の將然形を承け、ともは活用の動詞に等しき助動詞にてはその終止形を承け、活用の形容詞に似たる

助動詞及びずといふ助動詞にては、その將然形を承く。とが使役の助動詞及び受身の助動詞の連體形を承くることあるは、既に説きたり。

已然前提法。 助動詞の已然前提法の用例は、次の如し。

行かしむれば。

行かしむれど。

行くべければ。

行くべけれども。

助動詞の已然前提法も、必ず且爾乎波ばまたはどもを伴なふ。これらの且爾乎波はいづれも助動詞の已然形を承くること、用言の已然前提法と異ならず。

中止法。 助動詞の中止法の用例は、次の如し。

社員を大阪に行かしめ、商況を視察せしむ。

花は観るべく、實は食ふべし。

助動詞の中止法にも、またその連用形を用ふ。

命令法。助動詞の命令法の用例は、次の如し。

われをして行かしめよ。

汝等は忠良なる臣民たれ。

助動詞の命令法にも、その命令形を用ふ。但し、活用の下二段活用に等しき助動詞にては、亅爾乎波よを添ふ。

練習問題 第四

次の文章の中にある助動詞につきて、その法を説明せよ。

- 一。生徒たるものは、校則を守るべし。
- 二。昨日めでし花は、既に散りぬ。

- 三。犯人は直に取押さへられ、警察署に送らる。
- 四。多数の入會者ありしかば、はやくも満員となれり。
- 五。君來ずば、こなたより訪はむ。
- 六。治れる世の人は、道に遺ちたるを拾はず。
- 七。わが説を用ひられれば、必ず利あるべし。
- 八。去年木曾北陸道を上りしには、五萬餘騎と聞えき。
- 九。何人なりとも、立ち入ることを許さず。
- 一〇。をこの功名はせぬに如かず。
- 一一。まだ夏にならねども、日中は暑くなりたり。
- 一二。かれは浮説に惑はされ易く、人の長たり難し。
- 一三。師の示さるゝを見るに、思ひたると違はず。
- 一四。父は弟らに書を讀ませ、誤れる處を正さる。

次の文章の中に助動詞の法を誤れるものあらば、正せ。

- 一五。衆皆萬歳を唱へける。
- 一六。かくすれば、敵手に覺らる虞あり。
- 一七。御出で下さるを待ち居り候。
- 一八。夢の間に青春の時代は過ぎぬる。
- 一九。先生は世に名を知らるを願ひたまはず。
- 二〇。かれをしてその志すところを遂げしむれ。
- 二一。生徒には制服、制帽を著用せしむ規則なり。
- 二二。實務を習はすこと、三年に及びたり。

第四章 時

時。文法上、時間によりて動作を分ちて、動作の今行はれつ

つあるを現在といひ、既に行はれしを過去といひ、將に行はれむとするを未來といふ。また動作の全く終了したるを完了時といふ。

現在。現在をあらはすには、時の助動詞を添へず。

われ行く。

かれに語り聞かす。

友は入學を許さる。

過去。過去をあらはすには、時の助動詞きまたはけりを添

ふ。

われ行きき。

かれに語りきかせけり。

友は入學を許されき。

連用形
連用形
連用形

未完了時。未完了時をあらはすには、時の助動詞ぬ、つ
またはたりとむとを重ね用ふ。

われは明日行きなむ。

かれに語り聞かせてむ。

友は入學を許されたらむ。

練習問題 第五

次の動作の現在過去、未來及び三種の完了時をあらはせ。

一。遊ぶ。

二。起く。

三。捨つ。

四。評す。

五。推さる。

六。思はしむ。

次の文章につきて時を説明せよ。

七。雞の鳴く聲聞ゆ。

八。夜は既に明けたり。

九。虹あらはれたれば、やがて雨やまむ。

一〇。その卓見も遂に用ひられざりき。

一一。落人歸り來れりとて、家の内さわぎあへり。

一二。われらが蜻蛉釣りし野は、今は賑しき町となりぬ。

一三。時移りなば、效なからむ。

一四。日頃の功名の失せなむこと無念なり。

一五。汽車の著かむ時までには、停車場に出で迎へてむ。

一六。樂しかりし春も、半ば過ぎにき。

一七。爲朝が千度申しつるはこゝ候ふくと忿りけり。

第五章 品詞の轉成

轉成の名詞。

轉成の副詞

名詞の轉じて成れる副詞

今日は樂しき日なり。
試験の時間割は今日發表せられむ。

この前なる例の今日は名詞なれど、後なる例の今日は副詞なり。かくの如く、副詞には名詞の轉じて成れるものあり。昔、今日などは皆これなり。

流早く、舟通はず。

われは早く起きたり。

この前なる例の早くは形容詞なれど、後なる例の早くは副詞なり。かくの如く、副詞には形容詞の轉じて成れるものあり。形容詞より轉成する副詞はその連用形より來る。

花赤く咲く。

形容詞の轉じて成れる副詞

家新しく建つ。

この例の中なる副詞赤く及び新しくは即ち形容詞赤し及び新しいの連用形なり。

形容詞より轉成したる副詞が、下、動詞のありに連なるときは、これと融合して、例へば赤かり、新しかりとなり、ラ行變格活用に等しき活用をなし、これに似たる活用形を具ふ。

將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
赤から	赤かり	赤かり	赤かる	赤かれ	赤かれ
新しから	新しかり	新しかり	新しかる	新しかれ	新しかれ

轉成の接續詞

賞を受くるもの十二人に及びたり。

この人は佛蘭西語及び英語に達せり。

形容詞
赤から
赤かり
赤かり
赤かる
赤かれ
赤かれ
新しから
新しかり
新しかり
新しかる
新しかれ
新しかれ

動詞の轉じて成れる接續詞

この前なる例の及びは動詞なれど、後なる例の及びは接續詞なり。

かれはまた歌を善くす。

金は貨幣を鑄るべく、また裝飾品を作るべし。

この前なる例のまたは副詞なれど、後なる例のまたは接續詞なり。

副詞の轉じて成れる接續詞

練習問題 第六

次の文章を一つ一つの品詞に分ちて、その名をいひ、轉成せる品詞につきては特にその由來を説明すべし。

- 一。まづ君より始めよ。
- 二。善き行ある人には喜多し。
- 三。友大いに喜び、明日必ず來むといへり。

始
終
ス
マ
ス
ム

四。明日は記念式を行ひ、終れば展覽會を開くべし。

五。僕の君を知りしは五年の昔なりき。

六。秀吉ははじめ松下之綱の僕たりき。

七。初あらざるなけれど、よく終あること鮮し。

八。昔見もし聞もせしことも、楽しく語りあはむ。

九。朋友は憂を分ち、樂を偕にすべし。

一〇。をりしも秋の空高く晴れて、鳶の鳴聲ほがらかなり。

一一。この地の賑は、聞きしにまさる思あり。

一二。問ふは一時の恥、問はぬは一生の恥なり。

一三。種々の餘興の催もあれば、出席者は多からむ。

一四。冬物仕入の頃とて、大阪送の汽車積の貨物は著しく増せり。

一五。 おのれの欲せざるところは、人に施すなかれ。

一六。 いはれを聞けば、いと有り難く思はる。

第四篇

第一章 文章の主要成分

單語。

花。 犬。 われ。 字。 父。 家。 子。

美し。 走る。 書く。 譲る。

これらの花、犬、われ、字、父、家、子など及び美し、走る、書く、譲るなどは、いづれも一つの品詞にて、おのく、一つの概念をあらはせり。かくの如く、すべて一つの概念をあらはすものを單語といふ。

文章。 さて單語の相集りて一つの完結したる思想をあらはすときは、これを文章といふ。

文章
補(補正)
目録
索引
主要成分
副成分
修飾語
説明

花美し。

主語

犬走る。

客語

補

述語

われは字を書く。

父は家の子に譲る。

これらは、いづれも文章なり。

主語、述語。 右の文章はそれ〴〵花、犬、われ、父につきて或事

を敘述せるものにて、即ち

花、 犬、 われ、 父

は、いづれもその文章の主題なり。 かくの如き語を、すべて

文章の主語といふ。

また右の文章の中なる

美し、 走る、 書く、 譲る

は、それ〴〵その文章の主語たる花、犬、われ、父の状態、動作などを敘述せるものなり。 かくの如き語を、すべて文章の述語といふ。

いかなる文章にも、必ず主語と述語となかるべからず。

客語。 なほ前の

われは字を書く。

といふ文章の述語たる書くは、他動詞にて、

字を

は、その動作の及ぶ事物をあらはせるものなり。 かくの如き語を、すべて文章の客語といふ。

右の例の如く、述語が他動詞にて成れる文章には、主語と述語との外に、必ず客語なかるべからず。

補語。また、前の

父は家を子に譲る。

といふ文章にては、述語たる譲るは他動詞にて、家をはその動作の目的をあらはす客語なれど、別に

子に

といふ語にて述語の意義を補ふにあらざれば、完結したる思想をあらはすこと能はず。かくの如き語を、すべて文章の補語といふ。

述語が自動詞にて成れる文章も、補語を要することあり。

將軍白馬に乗る。

述語が形容詞にて成れる文章も、補語を要することあり。

花は雲の如し。

述語が使役の助動詞、受身の助動詞を含む文章には、必ず補語なかるべからず。

有志者は總代をして上京せしむ。

兎は犬に追はれたり。

文章の主要成分。上に説きたるが如く、文章には必ず主語と述語となかるべからず。またその述語の性質によりては客語と補語となかるべからず。されば、主語と述語と客語と補語とは、いづれか一つを闕きては、文章の成立たぬことあり。この四つを文章の主要成分とす。

第二章 文章の主要成分の構成

主語の構成。主語は文章の主題となる事物をあらはすも

のなれば、名詞または代名詞にて成る。

戦始る。

かれ去る。

主語は、また種々の亶爾乎波を伴なふことあり。

日本は強し。

花が咲く。

人の行く。

友も来りぬ。

春ぞ樂しき。

誰れか歸りたる。

述語の構成。 述語は主語のあらはす事物の動作、状態などを

を敘述するものなれば、主として動詞、形容詞にて成る。

鳥飛ぶ。

學博し。

述語はまた助動詞を伴なふことあり。

空霽るべし。

月出でたり。

われは往なむ。

主人は車夫に客を送らす。

北軍は南軍に破られたりき。

また亶爾乎波を伴なふことあり。

汝等努力せよ。

水清きか。

病は癒えたりや。

名詞、代名詞も、助動詞なりたり、または亘爾乎波ぞ、かと結びつきて、述語を成すことあり。

正成は忠臣なり。

威風堂々たり。

かれは誰ぞ。

これは何か。

客語の構成。 客語は述語たる他動詞の動作の及ぶ事物をあらはすものなれば、名詞または代名詞にて成る。

力山を抜く。

父かれを召す。

客語は必ず亘爾乎波を伴なふ。このを省略することあり。

客語に伴なふ
亘爾乎波

友は舟漕ぐ。

汝これ見よ。

補語の構成。 補語は述語たる動詞、形容詞の意義を補ふ事物をあらはすものなれば、また名詞或は代名詞にて成る。

學校長は卒業生に證書を授く。

兄は陸軍大尉となる。

春海の如し。

壯烈鬼神を泣かしむ。

知事は屬官をして事情を調査せしむ。

柳風に吹かる。

村長は村民より感謝狀を贈られたり。

補語は必ずと、の、ををして、よりなどの亘爾乎波を伴なふ。

補語に伴なふ
亘爾乎波

動詞、形容詞、助動詞の連體形。 動詞、形容詞の連體形及び動詞または名詞に結びつきたる助動詞の連體形が、下なる名詞を略して直に名詞の如く用ひらるゝことは、前に説きたり。されば、かくの如き語も、名詞と同じく、また文章の主語、客語及び補語となることを得べし。

降るは春雨か。

新しきはよし。

産まれたるは男兒なり。

純粹なるは少し。

妹は赤きを紫なるに著かへたり。

練習問題 第一

次の文章の主語、述語、客語及び補語を示せ。

- 一。獅子吼ゆ。
- 二。山もかすめり。
- 三。鶯や來鳴く。
- 四。朝うらゝかなり。
- 五。交際深し。
- 六。先生、書を著す。
- 七。誰れかこれを解する。
- 八。伯父、妹等に寫眞を示す。
- 九。一家、滿洲に移る。
- 一〇。從兄は一家を滿洲に移せり。
- 一一。一メートルは三尺三寸に等し。
- 一二。大臣は祕書官をして委員と交渉せしむ。

- 一三。余は父より一身を家業に委ねしめられき。
- 一四。はたらくが薬なり。
- 一五。君は老いたるをあはれみ給へり。

練習問題 第二

次の語または語群に適當なる語を加へて、文章を作れ。

- 一。人。
- 二。起く。
- 三。兒ども捕ふ。
- 四。われは従ふ。
- 五。先生は教ふ。
- 六。湯に混す。
- 七。同盟を約す。

第三章 文主

文主 例へば

力强し。

といふは、一つの文章にて、力はその主語、強しはその述語なり。然るに

牛は力强し。

といへば、これまた一つの文章にて、牛ははその主語の如く、力强しはその述語の如きものなり。即ち牛はは述語の如くなれる文章、力强しに對して、主語の如くなれり。かくの如き語を、すべて文主といふ。

われは身體強健なり。

前の例も一つの文章にて、身體は主語、強健なりは述語、われは即ち文主なり。

錫は色銀に似たり。

名古屋は世人これを中京ともいふ。

この例の中なる錫は及び名古屋ははまた共に文主なり。
文主の構成。 文主の構成は全く主語の構成と同じきこと、
前の諸例にて見るが如し。

練習問題 第三

次の文章の主語、述語、客語、補語及び文主を示せ。

- 一。君は家富めり。
- 二。いづれか年わかき。
- 三。太郎は學術優等なり。

四。酒は害あり。

五。水晶は外觀硝子の如し。

六。かれ贅力人に過ぐ。

七。余は性質音楽を好む。

八。庶務は幹事これを處理す。

第四章 修飾語及びその構成

修飾語。

櫻の花美し。

犬速に走る。

われはこまかき字を書く。

父は家をその子に譲る。

この例の中なる

櫻の	は	主語「花」に、
速に	は	述語「走る」に、
こまかき	は	客語「字を」に、
その	は	補語「子」に

附屬して、いづれもその意義を修飾するものなり。かくの如きものを、すべて文章の修飾語といふ。修飾語はまた文主に附屬することあり。

肥えたる牛は力强し。

主語の修飾語の構成。 文章の主語は名詞、代名詞にて成るものなれば、これに附屬する修飾語は、(一)連體法の動詞及び形容詞、(二)動詞、名詞に結びつきたる連體法の助動詞、及び(三)

且爾乎波の、がなどの結びつきたる名詞、代名詞にて成る。

(一) 吹く風すゞし。

小さい鳥飛ぶ。

(二) 老いたる人眠れり。

優勢なる敵現る。

(三) この繪珍し。

君が代めでたし。

文主の修飾語の構成

文主は、その構成、主語と同じければ、これに附屬する修飾語の構成も、また主語の修飾語の構成に同じ。

述語の修飾語の構成。 文章の述語は、主として用言にて成るものなれば、これに附屬する修飾語は、また主として(一)副詞、(二)に、を、と、へ、より、まで、にてなどの結びつきたる名詞、代名

詞及び(三)ば、とも、どなどの結びつきたる用言にて成る。

(一) 人皆去る。

石水に落つ。

本隊は山道を進む。

われ弟と軍艦を見る。

(二) 川東へ流る。

友遠方より來る。

汽車鹿兒島まで通ず。

われ筆にて字を書く。

水こほれば氷となる。

(三) われ死すとも退かじ。

家狭けれど美し。

述語が助動詞なりたり及び亘爾乎波ぞかななどと結びつきたる名詞、代名詞にて成るときは、主語の修飾語と構成の同じき修飾語を附屬せしむることを得。

正成は稀なる忠臣なり。

君は一村の模範青年たり。

かれはいづこの誰ぞ。

それは珍しき品か。

述語の修飾語に結びつくべき亘爾乎波に、とは省略することあり。

明治三十八年五月二十八日日本海の海戦あり。

この議論は實際行はれざりき。

余は斷然これを斥けたり。

述語の修飾語に結びつくべきに、との省略

客語及び補語の修飾語の構成。文章の客語及び補語は、共に主語と同じく名詞、代名詞にて成るものなれば、これに附屬する修飾語の構成も、主語の修飾語の構成と同じ。

われらは散る花を惜しむ。

將軍逞しき馬に乗る。

市民は精巧なる工藝品を觀光の遠人に送る。

修飾語の重用。修飾語は幾つも重ねて用ふることあり。

美しき鳥飛ぶ。

汽車始めて鹿兒島まで通ず。

君は實に一村の模範青年たり。

われらは散る美しき櫻の花を惜しむ。

名譽の將軍はわかき栗毛の逞しき馬に悠然と乗る。

複雑なる修飾語。修飾語には種々の語の集りて成れる複

雑なるものあり。左に數例を示す。

袂を吹く風すし。

輕き袂を吹く風すし。

受験者は殆ど皆合格せり。

本隊は極めて嶮しき山道を進めり。

正成は世に稀なる忠臣なり。

主人は某の大家の筆に成りし金屏風を藏せり。

乃木將軍は旅順の降將の贈りたる名馬に乗れり。

われらが日々に通へる學校は、風紀嚴肅なり。

修飾語の位置。前の諸例に見るが如く、修飾語は文章中にありてその附屬する語の上に立つて通例とす。

勇ましき老人の物語はいよく進みぬ。

この例にては、勇ましき老人のを一つの複雑なる修飾語と見て、主語物語に附屬すと解すべきなり。されば勇ましきと老人のとの二つの修飾語を重用せんとするには、特にその位置を定めて、次の如く改むるを要す。

老人の勇ましき物語はいよく進みぬ。

また

われは日々電車にて通學する生徒にあふ。

この例にては、日々といふ修飾語は通學するに附屬するか、あふに附屬するか、明ならず、次の如く改むるを要す。

われは電車にて日々通學する生徒にあふ。

われは電車にて通學する生徒に日々あふ。

練習問題 第四

次の文章の修飾語を示し、その何に附屬するかをいへ。

- 一。清き川、村の東を流る。
- 二。萬民皆天日の光を仰ぐ。
- 三。わが師は、温厚なる君子なり。
- 四。大君の惠の露は、あまねく民草を霑せり。
- 五。友はおもしろき通信を故國の同窓生に寄せたり。
- 六。君少し僕が情懷の苦を察せよ。
- 七。月盈つれば虧く。
- 八。眞に信憑すべきは、この新聞紙の記事なり。
- 九。脆きは人の心なるかな。
- 一〇。過ぎたるは、なほ及ばざるが如し。

- 一。最も小さきはその直径一寸に及ばず。
- 二。維盛の率ゐたる平家の軍勢は、富士川にて、水鳥の羽音に驚かされたり。

次の文章の主語、述語、客語及び補語に幾つかの修飾語を加へよ。

- 一三。山高し。
- 一四。馬、水を飲む。
- 一五。弟は寫眞を母に贈れり。

第五章 文章の主要成分の位置

主語、述語の位置

花美し。
犬走る。

文主の位置

前の例の如く、主語と述語とにて成れる文章にては、主語は上にあり、述語はその下にあるを通例とす。

文主は、その述語の如くなれる文章の上にあるべきこと勿論なり。

牛は力強し。

客語、補語の位置

われは字を書く。

將軍白馬に乗る。

父は家を子に譲る。

學校長は卒業生に證書を授く。

この例の如く、客語及び補語は主語と述語との間にあるを通例とす。

文章の主要成分の倒置。上に説きたる主語、述語、客語及び補語の位置は、わが國語にての自然の順序なれども、その文章の主眼とする主要成分をば、便宜に先に立たしむることあり。

行け、汝。

降れるか、雨は。

大いなるかな、孝の徳。

これらは述語を先に立たしめたるものなり。

夏休をわれらは待てり。

これを汝は何と思ふか。

雄々しき振舞をば人々ほめた、へたり。

これらは客語を先に立たしめたるものなり。

舊師にわれは遇ひたり。

弟には父この事を告げざりき。

父母の命令には、子たるものは服従せざるべからず。

これらは補語を先に立たしめたるものなり。

練習問題 第五

次の文章の主要成分の位置を通例の位置に改めよ。

- 一。美なるかな、山河の固。
- 二。昨日いづこに行きたるか、君は。
- 三。電中市營説に市民は舉りて反對せり。
- 四。かの話をば、われも聞きたり。
- 五。この機械に審査員は一等賞牌を與へたり。
- 六。かれの畫きし水彩畫を余は展覽會にて見たり。

- 七。 靜なる湖の面に、富士山は倒にその影を映ぜり。
- 八。 いづれの社長にも、わが兄は重く用ひられたりき。
- 九。 満座の男女に老僧は隨喜の涙を流さしめたり。
- 一〇。 歌へや、君も、めでたき歌を。

第六章 文章の主要成分の併置

主語の併置。 文章の主要成分は併置することあり。

朝夕はすゞし。

主人も客も共に笑ふ。

横濱及び神戸はわが國の二大港なり。

酒と煙草とは養生によろしからず。

これらは皆主語を併置したる文章の例なり。

主語併置の法則

主語を併置するには、そのまゝ主語を重ね用ひ、またはこれを接續詞にて接續し、或は接續詞の用をなす「爾乎波」として承接せしむること、前の例に見るが如し。

文主の併置。 文主も併置することあり。

牛、馬は力强し。

金も白金も産出多からず。

深井と清水とは、成績甚だ良好なり。

木戸、大久保及び西郷最も功あり。

文主併置の法則

文主は、その構成、主語と同じければ、併置の法則もまた異なることなし。

客語、補語の併置。 客語及び補語を併置する法則は、また主

語を併置する法則に準ず。

この地は米、綿を産す。

われは酒をも煙草をも用ひず。

生徒は博物館と商品陳列所とを縦覧す。

これらは客語を併置したる文章の例なり。

学校長は卒業生、及第生に證書を授く。

友は軍人にも實業家にもなれり。

頼朝は範頼と義経とをして平氏を攻めしめき。

この兒は知る人にも知らぬ人にも愛せられたり。

これらは補語を併置したる文章の例なり。

述語の併置。

植物は發育し、生長し、繁殖し、枯死す。

道近く、平なり。

正行は忠臣なり、孝子なり。

殿下著任せられ、直に乗艦せらる。

これらは述語を併置したる文章の例なり。

述語を併置するには、上なる述語の動詞、形容詞、助動詞に中

止法を用ふ。

述語を併置するに、上なる述語の動詞、形容詞、助動詞の中止

法の下に、てまたはしてを添ふることあり。

雨降り出でて、急にやまず。

川廣くして、淺し。

また名詞、代名詞と助動詞なり、たりとの結びつきで成れる

述語を併置するに、その助動詞を省略して、に、にて、にして、と

してなどを添ふることあり。

則 述語併置の法

報道敏速に且精確なり。

友の父は縣下の名望家にて、現に縣會議長たり。

風俗質朴にして、剛健なり。

絃聲嘈々として、また切々たり。

次に示すは、客語、補語と共に述語を併置したる例なり。

太郎は學を好み、最も數學に達す。

將軍白馬に乗りて、陣頭に立てり。

マルコニーはイタリヤ人にて、無線電信を發明せり。

境しづかにして、太古の如し。

われらは明日汽車に乗りて、海岸を巡らむ。

この終の例にては、汽車に乗りて、海岸を巡らむといふべきを、動詞に中止法を用ひて、時の助動詞を省略したり。

述語の如くな
れる文章の併
置

文主に對して述語の如くなれる文章も、また併置することあり。その併置の法則は述語併置の法則に準ず。

牛は體大きく、力強し。

われは身體壯健にて、元氣旺盛なり。

練習問題 第六

次の文章に就きて文章の主要成分の併置を説明せよ。

- 一。野も里も美しき朝日の光を浴みたり。
- 二。大臣、公卿悉く福原の京に移り給ひぬ。
- 三。かれと余とは郷里と小學校とを同じくせり。
- 四。兄は商業學校を卒業して、一年志願兵となれり。
- 五。北畠親房は職原鈔、神皇正統記などを著しき。
- 六。滿洲軍は遼陽を取り、進んで遂に奉天を陥れたり。

- 七。これらの三人は、學術優等にて、品行方正なり。
- 八。金星は、その光甚だ明にて、恰も月のごとし。
- 九。余はこの有爲の青年を東京の大學者、新聞記者及び實業家に紹介せり。
- 一〇。現御神の君、明德愈遠くして、威稜五洲の外に振ふ。

第七章 文章の主要成分の省略

文章の主要成分の省略。 文章の主語、述語、客語及び補語は、その一つを闕くときは、文章の成り立たぬことのあるものなれど、それと言外に推知することを得べき場合には、便宜にこれを省略することあり。

主語の省略。 左に主語を省略したる文章の數例を示す。

(われは)昨夜おもしろき夢を見たり。

(人は)動物と植物とを生物と總稱す。

會員は(本會)之を特別會員と通常會員とに別つ。

命令をあらはす文章には、主語を省略すること殊に多し。

(汝等)前へ進め。

(何人も)樹木を折るべからず。

述語の省略。

これはいかに(あるか)。

(われ)冀はくは賢慮を運らされむことを(請ふ)。

同じ述語を併置する場合には、最終のものの外は、これを省略すること多し。

兄は軍人になり、弟は商人になり、妹は音楽家になりぬ。

客語の省略。

名古屋は、世人これを中京ともいふ。
 酒は汝等これを飲むべからず。
 われはこの詩を愛し、しばくこれを朗吟せり。

補語の省略。

日本は韓国を自國に併せたり。
 先生はわが校にて英語をわれらに教へられたり。
 租税は人々期日に遅れぬやうにこれをその筋に納むべし。
 犯人は直に官吏に捕縛せられき。
 侍従は被害地を巡視し、町村長を郡役所に召集して、ありがたき聖旨をこれらの人々に傳へたり。

練習問題 第七

次の文章につきて文章の主要成分の省略を説明せよ。

- 一。いざ人々と共に君が代の萬々歳を祝せむ。
- 二。道を行くには、左側を通れ。
- 三。出品に手を觸るべからず。
- 四。君はいづこへ。
- 五。われは伯父に擊劍を、從兄に英語を學びたり。
- 六。鎌倉に行くには、大船驛にて汽車を乗り換ふ。
- 七。趙高は馬を指して鹿といひき。
- 八。試験の成績は明日發表せられむ。
- 九。校則は堅く遵守すべし。
- 一〇。幹事の任期は一箇年と定む。

第八章 句及び節

句。

花美し。

犬走る。

われ書を讀む。

將軍、馬に乗る。

菊、色白し。

これらは、いづれも一つの文章なること、既に説きたり。さて、これらの文章を用ひて、別に一つづゝ文章を作り、花の美しきは櫻なり。われは犬の走るを見たり。

かれは、わが書を讀むに倣はず。

この將軍の馬に乗る圖は、某大家の筆なり。

菊の色白きはこゝちよし。

などいへば、かの文章は、いづれも皆その獨立を失ひて、この文章の一部分となる。即ち

花の美しき は 主語

犬の走る は 客語

わが書を讀む は 補語

將軍の馬に乗る は 修飾語

菊の色白き は 文主

として、いづれも用ひてあり。かくの如く、文章の獨立を失ひて、他の文章の一部分となれるものを、句といふ。

句の種類

句には、名詞句、形容詞句、副詞句などあり。
名詞句。句の文章中にありて名詞の用をなすものを、
て名詞句といふ。

花の美しきは櫻なり。

われは犬の走るを見たり。

かれは、わが書を讀むに倣はず。

菊の色白きはこゝちよし。

形の大いなるは價貴し。

羽織は紋のあまり大いならぬが行はるゝ風あり。

かくの如き名詞句にては、そのもとの文章の述語を成せる
動詞、形容詞、助動詞に連體法を用ふ。

且爾乎波と及びては、また名詞句に承接することあり。

接 どの名詞句承

哨艦は敵艦見ゆと報ず。

衆議異議なしと決せり。

われは、試験はよく出来たりと思ふ。

かれは病ありとて闕席したり。

名詞句は文章の主要成分として、またその修飾語として、種
種に用ひらる。

形容詞句。句の文章中にありて形容詞の用をなすものを、
すべて形容詞句といふ。

この將軍の馬に乗る圖は、某大家の筆なり。

先生は才の短きわれを捨てたまはず。

瀑の落つる音は、百雷の轟く響に似たり。

われは、應訓の嚴肅なる家にて人となれり。

形容詞句にては、そのもとの文章の述語を成せる動詞、形容詞、助動詞に連體法を用ふ。かの連體法を用ひたる名詞句は、即ち下に名詞ことまたはものなどを省略したる形容詞句なることを見るべし。

形容詞句はすべて修飾語として用ひらる。

副詞句。句の文章中にありて副詞の用をなすものを、すべて副詞句といふ。

浪靜にて、航海安全なりき。

物價騰貴せば、細民は生活に困しまむ。

道遠くとも、一度は來たまへ。

葉落ちたれば、木立さびしくなりぬ。

反對説起りしかど、建議案は成立しき。

寒さ嚴しきに、參詣者多し。

昨日は日曜日なりしが、委員は皆執務せり。

即ちこれらの例にては、副詞句浪靜にてなどは、皆その下にある動詞、形容詞、助動詞の意義を限定して、述語の修飾語として用ひられたるなり。

年わかけれど、經驗に富める技師は、新に入社したり。

人々は水溢れて沼の如くなれる田畑を巡視せり。

兄は、年明くれば六つとなる妹に、お伽話を聞かせつ。

この例の年わかけれど、水溢れて、年明くればも、また皆副詞句にて、これらは主語、客語及び補語の修飾語の一部分として用ひられたり。

副詞句は、すべて修飾語として用ひらる。

節。

霜白し。

夜更けたり。

これらはいづれも一つの文章なり。さてこの二つの文章を併置して、

霜白く、夜更けたり。

といへば、これまた一つの文章となる。この場合に

霜白く、

夜更けたり

を、いづれも文章の節といふ。

文章の節を併置するには、第六章に説きたる述語併置の法則による。

家は毀たれて淀川に浮かび、地は目の前に畑となる。
陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されき。
月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。
峯の白雪深くして、谷の氷もとけざりけり。

練習問題 第八

次の文章の中の句と節とを挙げ、句につきてはその何句なるかをいへ。

- 一。わがかれを訪問したるは、昨日の午前なり。
- 二。人は皆おのが行の悪しきを覺らず。
- 三。われは獵師の山より還るに遇ひぬ。
- 四。幹事は準備成れりと満場に報告せり。
- 五。味のよき魚は、波の荒き海に住む。
- 六。世界は、日本のロシヤに勝ちたる所以を研究せり。

- 七。一年、大學に講談會のありしとき、われも參聽しき。
- 八。有志者は君を候補者に擬したれど、君は起たざりき。
- 九。苦心のかひありて、氏の飛行機は遂に成れり。
- 一〇。友日夜勉強せしかば、月桂冠はその頭に加りぬ。
- 一一。水落ち、石露る。
- 一二。旅館の燈火かすかにして、雞鳴曉を催す。
- 一三。なほ空しき地は多く、造れる家はすくなし。
- 一四。故郷は既に荒れて、新都は未だ成らず。
- 一五。わが國は東洋の強國と畏敬せられ、世界の列強は皆大使を駐劄せしむるに至れり。

第九章 文章の組織

文章の組織上の類別。文章は、これをその組織の上より類別して、單文と複文と重文との三つとなすことを得べし。

單文。

花美し。

犬走る。

われは書を讀む。

父は家を子に譲る。

これらの文章は、これを組織する成分に多少の差はあれど、いづれも單一なる思想をあらはせり。かくの如き文章を、すべて單文といふ。

牛は力強し。

この例の如く、文主を含める文章も、また單文なり。

朝日に匂ふ山櫻の花、外つ國人に見せたきまで美し。忙しき中に暫しの閑を得たるわれは、日頃慕はしく思へる古聖賢の遺しし書を、徐に明窓の下に讀む。

この前なる例は、花美しといふ單文に種々の修飾語を附け加へたるものにて、後なる例はわれは書を讀むといふ單文に種々の修飾語を附け加へたるものなり。されば、そのあらはせる思想は、いづれも單一なれば、二つながら、また單文なること明なり。

かの花もこの花も美し。

犬走り且吠ゆ。

われは神皇正統記と日本外史とを讀む。

父は長子と次子とに財産を譲る。

日本はイギリス、フランス、ロシアとは協約を結び、アメリカ合衆國とは覺書を交換せり。

公は識見高邁にして、精力絶倫なり。

これらの文章は、いづれも主語、述語、客語または補語を併置せるものにて、またその思想單一なれば、なほ單文なり。

複文。

花の美しきは櫻なり。

先生は才の短きわれを捨てたまはず。

葉落ちたれば、木立さびしくなりぬ。

社長は、意見行はれざりしかば、直に辭職せり。

これらの文章は、いづれも句を含みて、そのあらはせる思想は單一ならず。かくの如き文章を複文といふ。

重文

霜白く、夜更けたり。

陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されき。

月明に、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

これらの文章は、いづれも節にて成りて、そのあらはせる思想は単一ならず。かくの如き文章を重文といふ。

複文と重文との別

複文も重文も、単文とは異なり、共に重複せる思想をあらはすものなれど、複文にては、これに主従の關係あり、重文にては皆對等なり。

葉落ちたれば、木立さびしくなり、枯野のながめ、また異なる趣あり。

この例の如きは、一つの重文にて、これを組織する上なる節

は複文にて成り、下なる節は文主を含める單文にて成れるものなり。

陸軍は奉天にて破られ、海軍は日本海にて滅されしかば、ロシヤも遂にその力の日本に及ばざるを覺れり。

この例の如きは、一つの複文にて、述語の修飾語に重文にて成れる副詞句を含み、また客語として名詞句を含めり。

練習問題 第九

次の文章を單文と複文と重文とに分類せよ。

一。祠の傍に白き梅の花咲く。

二。この人の金牌を得たること、これにて三度なり。

三。柳は緑に、花は紅なり。

四。相撲に負けたる力士、夜更けて歸る。

- 五。村の兒どもは里川の岸に鮠の子を漁れり。
- 六。わかき男は大根を洗へる手を休めて、こなたをながめたり。
- 七。精神一たび到らば、何事か成らざらむ。
- 八。會社は交際廣く、人品卑しからざる外交員を募る。
- 九。わが海軍に身を委ねむと志ししは、實に旅順口閉塞の壯舉が一代の少年のわかき純潔なる血を沸かしめし結果なり。
- 一〇。出で行く船も、入り来る車も、皆石炭を満載せり。
- 一一。身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。
- 一二。石の牀、木葉の衾、いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしに、すさまじき心ちせらる。

第十章 文章の性質

文章の性質上の類別。文章は、またこれをその敘述の性質の上より類別して、平敘文と疑問文と命令文と感歎文との四つとなすことを得べし。

平敘文。

梅の花いと白し。

われは書を読む。

原因はなほ明ならず。

友は本校より選手に選拔せられむ。

これらの文章は、いづれも思想をそのままに敘述したるものなり。かくの如き文章を平敘文といふ。

疑問文。

何をか武士道といふ。

このあたりや昔の城のあととなるべき。

夜ははや明けしか。

わが説、君が意を得たりや。

かしこに立てるは誰ぞ。

これらの文章は、いづれも思想を疑問の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を疑問文といふ。

世の中は何か常なる。

われ豈これを知らざらむや。

これらのもまた疑問文なれど、疑問の意は變じて決定の意となれり。かくの如きを反語の文章といふ。

反語の文章

命令文。

急がばまはれ。

帝國をして常に優越なる地位にあらしめよ。

生徒は必ず制服、制帽を著用すべし。

油斷すな。

これらの文章はいづれも思想を命令の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を命令文といふ。

感歎文。

一月のけしきはおもしろきかな。

一かのをりのまとは、實に樂しかりしよ。

これらの文章は、いづれも思想を感歎の意にあらはせるものなり。かくの如き文章を感歎文といふ。

練習問題 第十

次の文章を平敘文、疑問文、命令文、感歎文に分類せよ。

- 一。笑ふ門には福來る。
- 二。各員一層奮勵努力せよ。
- 三。汝等は、寧ろ常識を具へたる凡人たれ。
- 四。夢にも君と親とを忘るな。
- 五。汝は平家の侍よな。
- 六。公もまた人傑なるかな。
- 七。軍人は忠節を盡すを本分とすべし。
- 八。わが實業家の團體は、米國にて大いに欺待せられき。
- 九。一切の準備は既に整へりや。
- 一〇。何の幸かこれにしかむ。

第十一章 係結法

終止形を用ふる終止法。

梅の花白し。

われ道を求む。

けさ鶯鳴きき。

この例の如く、終止法には普通に終止形を用ふること、既に第三篇に説きたり。

連體形を用ふる終止法。

梅の花ぞ白き。

われ道をなん求むる。

けさぞ鶯鳴きし。

係
一。は、お、を
終止(終止法)

二。は、なん、や、の
終止(連體形)

三。は、ぞ、を、し、を
終止(終止法)

前の例に示すが如く、述語の上にぞまたはなんといふ亘爾乎波の加りたる文章にては、その終止法に連體形を用ふるを法則とす。

梅の花や白き。

たれか道を求むる。

けさ鶯や鳴きし。

この例の如く、やまたはかといふ亘爾乎波が述語の上にある疑問文にても、同じくその終止法に連體形を用ふ。

已然形を用ふる終止法。

梅の花こそ白けれ。

われ道をこそ求むれ。

けさこそ鶯鳴きしか。

この例の如く、述語の上にこそといふ亘爾乎波の加りたる文章にては、その終止法に已然形を用ふ。

係結法。上に説きたるが如く、述語の上にある亘爾乎波によりて終止法を異にすることを係結法といふ。さてぞ、な、ん、や、か、こそ、の、亘、爾、乎、波、を、係、といひ、係の亘爾乎波に應じて異なる終止法を用ふることを結といふ。

複文の係結法

複文にては、句の中のぞ、なん、や、か、こそは係とはならず。

色なん美しきに、香さへ高し。

われは今日こそ行くべかりしに、またも障出で來ぬ。

但しとの承接する名詞句は、別にその句に係結法を用ふ。

大臣はたれかあると召し給へり。

老武者一人、某こそ御供仕るべけれとなん答へける。

を示す、その——を加へたる部分は主部にて、——を加へたる部分は説明部なり。

花美し。

梅の花甚だ美し。

われは字を書く。

壇上に立ちたる學校長は、第三回の卒業生と學年試験の及第生とに親しく卒業證書と修業證書とを授く。明治四十一年十月天皇陛下は戊申詔書を降し給ふ。花の美しきも、實のうまきも、薔薇科植物に多し。この時、哨艦は敵艦見ゆと報ず。有力なる反對説起りしかど、建議案は遂に成立しき。年わかけれど、經驗に富める技師は、新に入社したり。

文主を含める文章にては、その文主とこれに附屬せる修飾語とを主部とし、文主に對して述語の如くなれる文章を説明部とす。

この牛は力强し。

小林生も大原生も共に品行方正にて、學術優等なり。當地にては、帽子の縁の稍廣きが、最も賣行よし。

文章の解剖。一つの文章につきて、その組織成分を検し、一つ一つに分解して、これが關係を明にすることを、文章の解剖といふ。

文章を解剖するには、次の順序によるべし。

- (一) 單文か複文か重文かの別を明にすべし。
- (二) 主要成分の省略せられたるものを補ふべし。

單文解剖の例

- (三) 主部と説明部とに分つべし。
 - (四) 主部に就きて、主語と修飾語とを指示すべし。
 - (五) 説明部に就きて、述語とその修飾語とを、客語とその修飾語とを、及び補語とその修飾語とを指示すべし。
- 文章解剖の例。次に單文を解剖する例を示す。

この時、わが砲兵は猛烈なる掃射を今や退却せむとする敵の騎兵に加へたり。

主部 わが砲兵は

主語 砲兵は

修飾語 わが

説明部 この時猛烈なる掃射を今や退却せむとする敵の騎兵に加へたり

文主を含める單文の解剖の例

次に文主を含める單文の解剖の例を示す。

東京は帝國の首府にて、もと江戸といへり。

この文章には省略せられたる主要成分あり。これを補へば、次の如くなる。

東京は帝國の首府にて、もと人はこれを江戸といへり。

述語 加へたり

修飾語 この時

客語 掃射を

修飾語 猛烈なる

補語 騎兵に

修飾語 敵の

同 今や退却せむとする

主部 東京は

主語 東京は

説明部 帝國の首府にて

述語 首府にて

修飾語 帝國の

説明部 單文もと(人は(これを)江戸といへり

主部 (人は)

主語 (人は)

説明部 もと(これを)江戸といへり

述語 いへり

修飾語 もと

客語 (これを)

補語 江戸と

次には複文解剖の例を示す。

複文解剖の例

賛成者なかりしかば、緊急動議は消滅せり。

主部 緊急動議は

主語 緊急動議は

説明部 賛成者なかりしかば、消滅せり。

述語 消滅せり

修飾語句 賛成者なかりしかば

主部 賛成者

主語 賛成者

説明部 なかりしかば

述語 なかりしかば

重文解剖の例

次に示すは、重文解剖の例なり。

石の階九仞にかさなり、朝日、朱の玉垣をかゞやかしぬ。

第一節 單文 石の階九仞にかさなり

主 部 石の階

主 語 階

修飾語 石の

説明部 九仞にかさなり

述 語 かさなり

修飾語 九仞に

第二節 單文 朝日、朱の玉垣をかゞやかしぬ

主 部 朝日

主 語 朝日

説明部 朱の玉垣をかゞやかしぬ

述 語 かゞやかしぬ

客 語 玉垣を

修飾語 朱の

練習問題 第十二

次の文章を解剖せよ。

- 一。 早朝、鹽竈の明神に詣づ。
- 二。 沈黙は愚人の甲冑なり、奸者の城塞なり。
- 三。 舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。
- 四。 大志を懐くものは、身を持つること堅し。
- 五。 黒紗の如き雲の絶間より月こそあらはれて候へ。
- 六。 桃李抑、何を言ひてか自ら蹊を成せる。

- 七。相構へて今度宇治河の先陣勤めて高名し給へ。
- 八。老將は兵を談ぜず、良賈は深く藏す。
- 九。言多きものは卑しとせられ、語少きものは憚らる。
- 一〇。造化の大能力に比して、人間の微なることを思ひ、崇高の念凜然として懐を動かせり。
- 一一。峽中の朝風面を吹きて、心地よく、疲勞も稍癒え、體力も稍復し、驢背にも稍慣れたり。
- 一二。かの建築、かの彫刻、かの繪畫、一面は、これが保存にとめ、一面は、これが振興につくさざるべからず。

日本文法教本下巻終



大正元年八月七日印
 大正元年八月十日發
 大正元年九月廿七日訂正再版印刷
 大正元年九月三十日訂正再版發行

日本文法教本
 下巻定價金貳拾五錢

著者 金澤庄三郎
 發行所 野村宗十郎
 印刷者 野村宗十郎
 發行所 野村宗十郎

著者 金澤庄三郎
 發行所 野村宗十郎
 印刷者 野村宗十郎
 發行所 野村宗十郎

西 野 虎 吉
 野 村 宗 十 郎
 三 木 佐 助
 林 平 次 郎

東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 東京市京橋區築地三丁目十一番地
 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
 大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
 東京市日本橋區數寄屋町九番地

【無印金口】東京第五參貳番
 東都販賣所

(刷印所造製版活地築京東社會式株)

